



ポーランド議会の突風

もぎ のりえ
茂木 規江

アダム・ミツキエヴィチ大学・講師

2011年10月に行われたポーランド議会選挙の結果、同年6月に政党登録をしたばかりのパリコト運動が第3党に躍進した。ヤヌシュ・パリコトを党首とするこの新党は、自由至上主義、政教分離を標榜している。そして反教会主義の立場をとり、同性愛者の権利拡大、妊娠中絶、麻薬の合法化及び大幅な税制改革を訴える。これはローマ・カトリック教会の政治的影響力が強いポーランドでは異例であり、かつ歴史的なことでもある。パリコト運動が議席を獲得する以前には、公然と教会批判をして議席を得られた政党はなかったからだ。

ところで、この選挙ではもう1つポーランド政治上初ということが起きた。それは、パリコト運動から議席を得た2人の党員のことである。この2人とは性転換者アンナ・グロヅカ議員と、自らが同性愛者であると公表し、同性愛者の人権擁護活動家として知られているロベルト・ビエドロニ議員である。パリコト運動の表看板となるこの議員らは、社会での少数派の人権擁護及び権利の拡大を声高に唱える。また同党には、元カトリック教会の神父で、週刊誌『事実と神話』の編集者でもあるローマン・コトリンスキも、党員として名を連ねており、教会との軋轢を生む話題には事かない。しかし、メディア関係者や政治家の中には、パリコト運動関係者の手段を選ばない戦術

を、「品が無い」と眉をひそめ一線を画する者が多いとも聞く。ちなみに標的にされているカトリック教会だが、パリコト運動には冷静に対処をするという以外の動きは見られない。

昨年の選挙結果を、EUの中でも経済成長を続け、経済的な安定を得ているはずのポーランドで、今までの政治に飽き足りない有権者や、既存政党に不満を抱く有権者が、変化・改革を求めて刺激の得られそうな政党を選んだと解釈できる。さらに保守的な価値観からの切り離し、カトリック教会離れが進んでいることを裏付ける結果だったともいえよう。パリコト運動から選出されたグロヅカ議員も「お互いの違いを乗り越えて、誰もが住みやすいと感じられる、開かれたポーランドを目指す」と述べている。ただし、パリコト運動に投票した有権者が、20代前半の男性が大半を占めていたことから、「政治のことを何も知らない連中が選んだ党」との批判の声があったことも付け加えておきたい。

さて、ヤヌシュ・パリコトという人物だが、以前は現首相トウスクの所属する「市民プラットフォーム」の党員だった。当時から彼の演出する、その時々々の社会事情を利用した挑発的な行為は、マスメディアを通して物議をかもししていた。パリコトの奇行ともいえる行動の背景には、自らをピ



エロに仕立てることで「市民プラットフォーム」が公には口にできないことを代弁し、党に批判が向くのを避ける役割を担っていたと言われている。パリコトの演出は「市民プラットフォーム」離党後、党首となった今も健在である。

昨年の選挙直後には、政教分離を強く主張するパリコト運動が、下院本会議場内にある十字架は違憲だとし撤去を求めるなど、積極的に同党の方針を実行してきた。こういった動きは今年に入っても衰えることなく、つい最近もマスメディアを賑わせていた。麻薬合法化を推進するパリコトは、1月下旬に議会の一室で大麻を吸う計画をしたが、これには他の議員から、「議会内での違法行為は容認できない」と待ったがかかり、彼は手にしたジョイント（大麻タバコ）に火をつけただけで、余興終了となった。計画は失敗したが、パリコト運動及びパリコト自身を印象付けるという宣伝の面からは十分効果があった。一連のこういった行為を、野心家のパリコトがマスメディアを巧みに使った、格好の自己宣伝行為だと非難する声もある。確かに、彼は自身のブログにも日記形式で、意見を積極的に発信しているし、特にパリコトに関心がない有権者の中にも、「今度は何をするだろう」といった、余興を期待している感があることも否めない。

パリコト運動が敵視しているカトリック教会だが、党首であるパリコト本人が教会をどのようにとらえているのかは定かではない。実際、彼は自身の子供には、カトリック教徒として洗礼を受けさせている。2005年から1年間にわたり、パリコトが投資をしていた出版社が、保守的週刊誌『OZON』を発行していたことや、その編集に、カトリック原理主義者と呼ばれる人物がかかわっていたという事実もある。こうしたことから見ても、本音と建前をうまく使い分けていると考えるのが無難だろう。

時局を読むことにたけたパリコトにとって、議員でいることは、自己の目的達成の為の手段でしかないのだ、との指摘する人もある。彼が目指しているものが一体何なのか現状では不明だが、今彼の行っている事が手段の1つだとすれば、パリコト運動設立も1つのプロジェクトでしかないことになる。あえて挑発行為を繰り返すパリコトを一種の起爆剤と考え投票した有権者の期待が、裏切られることなく、かつどの程度まで満足させられるのか、そしてパリコトにとって有権者の期待とはどんな意味をもつのか、これからの4年間に注目したい。